

主に喜ばれる者に

コリントの信徒への手紙Ⅱ五章一～十節

だから、体を住みかとしていようと、体を離れていようと、
ひたすら主に喜ばれる者でありたい。（9）

パウロは地上の生涯を終えて神のもとへ携え上げられる日を心から待ち望んでいました。けれども彼は、天上の世界のことを思うあまり、地上の生活を疎かにしたというわけではありません。そのパウロの思いが今日の聖句に言い表されています。パウロが第一に願つていたことは、どんなときにも主イエスと共に生きることであり、主に喜ばれる者となることでした。生きるか死ぬかは二の次だったのです。生死を貫くところのパウロの願いが、主に喜ばれる者となるということでした。多くの困難に直面しながらも、パウロが力強い歩みを続けられたのは、この熱い願いがあつたからです。私たちは誰に喜ばれるために、一度限りの大切な人生を用いているでしょうか。パウロのように、主イエスに喜ばれる者となることをひたすら願い求めようではありませんか。